

現代人の家族観形成過程の追究 — 2 人の父親についての聞き取り調査を通して —

長坂 瑞希[※]

The Process of Forming a Family View in the Modern Era

Mizuki NAGASAKA

1. はじめに

筆者が物心ついた頃には、両親が離婚しており、父子家庭から母子家庭を経て現在に至っている。両親が離婚したのちも、筆者にとってはどちらか一方の親と疎遠になったわけでもなく、離婚しているとは周りから思われないほど両親の繋がりはあった。しかし、いわゆる「一般的な家族」¹⁾とは少し違っているところがある。それは、父親という存在が2人いるということである。一人は筆者にとっての生物学的父親であり、もう一人は社会的父親である。²⁾このようなケースは現代において珍しいことではなくなっているが、筆者が小学校や中学校の頃は友人からの軽蔑を恐れ、もう一人の父親の存在が言い出せず黙っていた時期があった。当時は「自分は普通と違う」「私は一般的な家族ではない」といった感情が渦巻いていた。その後大学に入り、自分の家族について改めて考えた時、「普通って何」「一般的って」という疑問が浮かび、このことが、筆者が「家族とは何か」ということについて研究をするきっかけとなっている。

ここでは、筆者の父親2人に家族観についてのインタビュー調査を実施した。変化のめまぐるしい日本社会で生まれ育った彼らの語りから、彼らの家族観を読み取るとともに、定位家族の影響および、生殖家族形成の有り様を考察する。家族観に関する研究の多くは、将来の家族観についてや、未婚者に対するインタビュー調査がほとんどである。そこで、定位家族を経て、現在の生殖家族を経験している父親に話を聞き、その語りを分析することで、彼らの家族観を描き出すことおよび、「家族が変わった」と言われる時代である今、社会状況や価値規範の変化を受けて、個人の家族観がどのような変容を遂げたかを具体的にみていくことにする。

2. 現代日本における家族の特徴

2.1. 結婚・離婚の動向

現代の日本において、血縁関係のある父親、母親、子で成り立っている家族が一般的とみなされているなかで、母子家庭や父子家庭、ステップファミリーも数多く存在している。

キーワード：現代人、家族観、家族関係

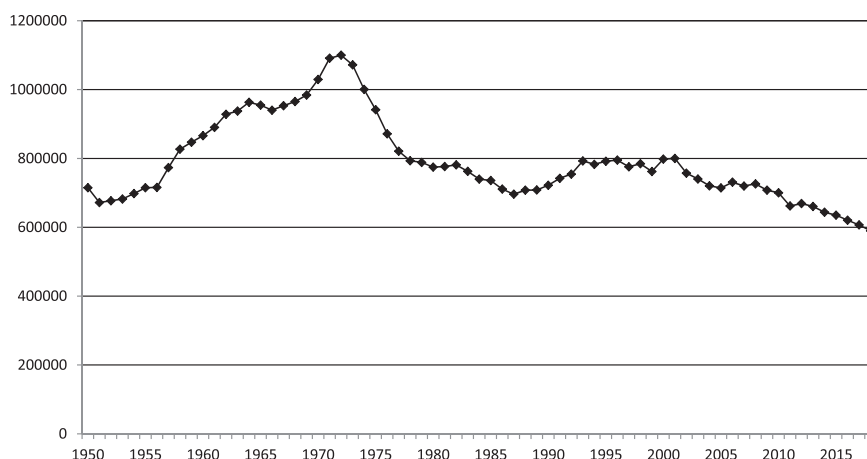
Keywords: Modern Era, Family View, Family Relationship

※ 本学文学研究科 社会文化学専攻

その他にも養子縁組や里親という制度に基づく家族が存在する。

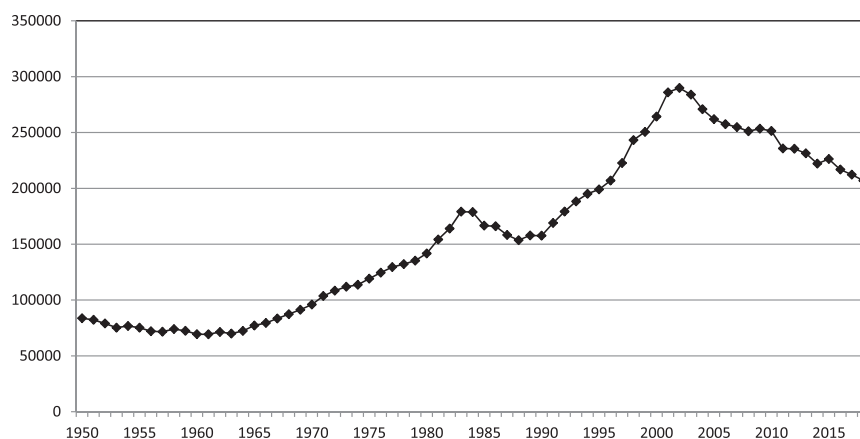
はじめに、人々の結婚・離婚に関するデータを確認しておく。「人口動態統計」によると、図1に示したとおり、1970年代前半をピークに、2000年頃までは80万組前後で推移してきたが、それ以降は減少傾向にある。2018年（平成30年）の婚姻件数は59万組（推計）である。一方、図2に示したとおり、離婚件数は戦後から一貫して増加してきた。2002年（平成14年）の289,836組をピークに減少をみせているものの、2018年も20万7千組（推計）と高水準を保っている。このような離婚件数の多さが、父子家庭や母子家庭、ステップファミリーを作り出す一因となっており、「一般的」でない家族を増加させているといえる。

図1 婚姻件数の年次推移



注:昭和47(1972)年以前は沖縄県を含まない。平成29(2017)年までは確定数、平成30(2018)年は推計数。
出所:平成30年(2018)人口動態統計の年間推計

図2 離婚件数の年次推移



注:昭和47(1972)年以前は沖縄県を含まない。平成29(2017)年までは確定数、平成30(2018)年は推計数。
出所:平成30年(2018)人口動態統計の年間推計

2. 2. 戦後の家族体制

戦後から現在に至るまで、日本の社会は大きく変わり、家族と結婚をめぐる膨大な戦後史が形成されていったと浅野富美枝は述べている（浅野 2011:204）。浅野は戦後の家族体制を四つに区分しており、表1は、四つに区分された戦後史を筆者がまとめ直したものである。

表 1 四期に区分された家族における戦後史

第一期	第二次世界大戦終了～ 1950 年代前半	戦前の家制度解体期
第二期	1950 年代後半～ 1970 年代前半	高度経済成長期の中での「日本型近代家族」と「戦後家族体制」の確立期
第三期	1970 年代後半～ 1990 年代前半	女性の社会進出や結婚観の変化、少子高齢化の進行などによって「日本型近代家族」にゆらぎが見え始めた時期
第四期	1990 年代後半～今日	「戦後家族体制」の崩壊と家族の多様化、新しい家族体制の芽生えの時期

（出所 浅野富美枝, 2011, 『歴史のなかの家族と結婚』 p.204 より筆者作成）

第二期の日本型近代家族の成立過程について、浅野は「戦前の家族を規定していた家制度は、日本国憲法の制定、民法改正などによって解体され、戦後の家族のなかに、次世代育成と生活共同の新しい原理が芽生えたが、それと同時に、資本主義経済の原理が家族の内部に浸透した。（中略）戦後復興とそれに続く高度経済成長をとおして、家族を経済システムのサブシステムへ再編し、『男は外で働き、女は家を守る』といった企業社会を支える日本型近代家族の確立をもたらした」と説明している（浅野 2011:205）。

その結果、人々の生活ネットワークの基盤である地域社会の解体を背景に、戦後日本の家族は深刻な歪みを抱え込むことになった。その一方で、現在では多様な家族が出現し、新しい家族を創造する試みがみられる。女性も男性も家庭に責任を持ち、同時に社会で働く男女共同参画社会を形成し、家族のなかに民主主義を築こうとする動きが、国際的な連帯のもとに組み込まれていると浅野は指摘する（浅野 2011:205）。すなわち、第三期においては、多様な家族が出現したこと、性別役割分業の見直しが図られるようになってきたことが特徴として挙げられる。

このような家族の枠組みの変化と、家族内での新たな価値観の出現は、家族形成の最初の契機である結婚観にも変化をもたらしたと浅野は述べる。個々の家族が家制度下におかれていた戦前には、結婚とは、第一に家の存続に必要な跡取りとなる男子を確保するための手段であり、第二に家と家との新たな結び付きと考えられ、つまり、戦前では、結婚する当事者の意思は二の次とされ、配偶者の選択は家長である戸主の同意を必要とされていた（浅野 2011:206）。しかし戦後、日本国憲法第 24 条の制定によって、結婚の位置づけは大きく変わった。同 24 条には、①婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。②配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならないと規定されている。

このように、結婚は両性の平等のもとに成立し、家族の基礎は婚姻からなるものと明確に示されたのである。この点について浅野は、「結婚観の変化は、多様な結婚のあり方と

結婚しない生き方をもたらした」と述べている（浅野 2011:206-208）。

先程述べた日本国憲法に基づき、家族に関する法律は、戦後次々と改正されていった。しかし、今もなお現代の私たちの生活の中に深く定着した戦前の家制度の考え方は、法制度が改正されてもすぐにはなくなったわけではなく、暗黙の中で留まっているように見える。

家族の戦後体制について落合恵美子は、「人々は家族を考えるときには、社会と関係づけず、私事と思ってきたのか」という疑問を抱き、つまり、人々は普段、公的世界と私的世界は分離したものだと考えている（落合 2004:99-100）。しかし、実際は分離しているのではなく、公的な世界も私的な世界も、全部含めて「社会」であると落合は述べている（落合 2004:100）。また、落合は、「家族の戦後体制」の特徴を女性の主婦化、再生産平等主義、人口学的移行期世代が担い手の三点を挙げている（落合 2004:101）。表2は、落合が挙げた「家族の戦後体制」の特徴を筆者がまとめたものである。

表2 「家族の戦後体制」の特徴

「女性の主婦化」	戦後女性はまず、主婦になったことを示している。女性が社会に進出していったということはトレンドの見誤りである。
「再生産平等主義」	みんなが、適齢期に結婚し、子どもが二、三人いる家族を作ることであり、子どもは二、三人いなければならないという画一主義であった。
「人口学的移行期世代が担い手」	戦後の日本社会は、人口転換の最中で、跡取りが親と同居する直系家族制をとっていることは、もちろん文化的要因で、核家族化のさなかにもそれが実現し続けられたのは、人口学的条件があったからこそである。

（出所 落合恵美子, 2004, 『21世紀家族へ』 p. 101, 114 より筆者作成）

落合が挙げた「家族の戦後体制」の特徴は、現在における一般的な家族の基盤とみなされている。

ここまで、家族の戦後体制について、先行研究を整理しておいた。ここから明らかになったこととして、戦後において「家族体制」についての見直しという試みがあったこと、現代において「家族の戦後体制」が全て消滅しているわけではないことなどがある。しかし、日本国憲法の公布により、結婚の見方は変わった。また、戦後の日本は、高度経済成長とともに、アメリカを中心として広がったウーマンリブ運動³⁾が展開されていった。また、平成の代表的な男女平等を実現する政策としては、1999年（平成11年）に「男女共同参画社会基本法」が施行され、男女がお互いに尊重するとともに、家庭生活だけでなく、様々な活動において、基本的平等を第一とするものであった。つまり、戦後日本においての家族体制誕生や崩壊などの歴史は、「女性」の地位の確立が大いに関係しているとともに、現代における「多様な家族」の先駆けなのではないだろうか。戦後の女性に対する政策や位置づけが、家族の形成に関して大いに関係していることが明らかになった。

3. 家族に対する意識の変化

ここでは、上野千鶴子および、山田昌弘が提唱した家族意識における概念について才津

芳昭の論考を基に紹介し、「家族の多様化」について言及していく。

上野千鶴子は、日本のフェミニストのパイオニアであり、家族社会学やジェンダー研究を行っている。山田昌弘も、家族社会学やジェンダー研究を行っており、「パラサイトシングル」という言葉を誕生させた人物である。

まず、家族意識について代表的なものとして上野の「ファミリー・アイデンティティ〈FI〉」という概念が挙げられる。文字通り何を家族と同定するかという「境界の定義」を指すもので、家族の実体（主として居住範囲と血縁・婚姻関係）と意識のズレ、また、家族メンバー相互のズレを調査するために導入されたものであるという（上野 1991:5）。

才津によれば、上野が心理学的知見を応用しているのに対し、山田はいわゆるエスノメソドロジー（人々が日常生活を構成していく方法を研究するアプローチ）に基づいた「主観的家族像」という概念を提唱しているという（才津 2000:125）。

山田は、典型的な近代家族（核家族）では、家族を意識する際の基準として、①親族であること、②家族としてすべき活動を現にしていること、③情緒的に愛着を感じることが重なっていたが、いまや個人によりそれらはズレているとされ、人々はその基準を選択的に使用し、自らの家族関係を形成しているという（山田 1989:98）。

これを踏まえて才津は、以上の考え方は近年、「構築主義的アプローチ」あるいは「解釈学的アプローチ」と称される研究手法として欧米で発展していると述べており、欧米での研究は、人々の日常生活のなかで交わされる言説において「家族」というものがいかに構成され、いかなる意味を付与されるかを丹念に析出するものであるという（才津 2000:125）。

つまり、「家族」を定義せず、血縁や居住等によって客観的に観察され、学問的・社会的定義として一般化された「家族（The Family）」ではなく、個人により、状況により変動する「家族（family）」を個別具体的に記述することを目的にしているのである。

様々な家族意識の研究が行われている中で才津は以下のように述べている。

確かに私たちは、家族に限らず何に関しても、自分独自の意識だと思っていながら、実際には同様の意識をもつ者が周囲に存在することにしばしば気づかされるものだ。つまり、絶対的独自性を有する意識としての「主観」など存在しないのが現実であり、それゆえ個人の主観的・選択的構成体としての「家族」においても、その多様性は一定の枠に収まらざるを得ない、と考えるのが妥当である（才津 2000:126）。

つまり、人々は「家族というのはこういうものだ」という社会から半強制的に刷り込まれた固定概念をもとに「家族」について考え、また、その固定概念から家族意識を形成しているのではないのかと思われる。しかし、それは大きな誤りであり、学問的・社会的定義として一般化された「家族（The Family）」は、まさに社会が作った「家族」であり、個人によって作られる「家族」が真の「家族」なのではないだろうか。家族意識は人それぞれ異なっており、当たり前である状況によって、人々は、自分が考える家族意識を他人に押し付け、共有する、その行為そのものが家族観のズレを発生させる要因となっている可能性がある。

ここまで、日本において戦後から家族体制が見直され、男女平等の実現を目指しながら、新たな「家族」の誕生について言及してきた。では実際に、以上に述べてきた戦後における家族の変遷の中を生きてきた人は、どのような「家族」を形成するのか、次節で検討していきたい。

4. 定位家族から生殖家族までの道のり

4.1. 調査の概要

筆者の2人の父親にインタビューを行い、それぞれの父親が生まれてから現在に至るまで、何に影響を受けながら、また彼らの「家族」とは何なのかを発言から読み取るとともに、一例としての、定位家族から現在の生殖家族に至るまでの道のりについて明らかにする。

(1) 目的

「人は家族を形成する際、自分が育った環境にどのように左右されるのか」、ということ念頭に置き、筆者の2人の父親にインタビューを行い、家族変動の流れを受けながら生まれ育った2人の父親の語りから、彼らの家族観を読み解いていく。

(2) 対象と方法

対象：筆者と血縁関係のある生物学的父親（Kさん）と筆者の就学時から生活を支えている血縁関係のない社会的父親（Yさん）の2名。

方法：それぞれの父親に対し、約10項目の質問事項について、筆者と父親の1対1の形式でインタビューを行った。ICレコーダーで録音し、語りを文字起こしし、カテゴリーごとに分類し、それぞれの語りを分析した。

(3) 質問事項

表3は、質問事項をそれぞれ、A【結婚前】B【結婚当初】C【二度目の結婚後】D【現在の家族関係を築いた後】E【定位家族と生殖家族のズレ】F【子どもに望む「家族」】G【現在の「家族像」】のカテゴリーを設定したものである。

なお、Kさんのみ、Yさんのみに対する質問事項も設けている。

表3 KさんYさんに対するカテゴリー別質問事項

カテゴリー	質問内容	質問対象者
A 結婚前	○生殖家族の状況について。(家族構成等) ○幼い頃や結婚するまでの家族像について。	(Kさん・Yさん)
B 結婚当初	○初めて結婚した際の理想や目標について。 ○結婚後における家族像の変化について。	(Kさん・Yさん)
C 二度目の結婚後	○理想や目標について。 ○家族像の変化について。	(Kさん)
D 現在の家族関係を築いた後	○新しい家族を築いていこうとする際の家族像について。 ○新しい家族状況における留意点などについて。 ○現在の家族関係に対するきっかけについて。	(Yさん)
E 定位家族と生殖家族のズレ	○自身の定位家族と生殖家族の違いやその要因について。	(Kさん・Yさん)
F 子どもに望む「家族」	○自身の子どもたちに望む家族形成について。	(Kさん・Yさん)
G 現在の「家族像」	○今、考える「家族像」について。	(Kさん・Yさん)

(4) インフォーマントの属性（定位家族と生殖家族）

研究協力者の父親2人を区別するため、血縁関係のある父親をKさんとし、血縁関係のない父親をYさんと記す。

まず、生殖家族の状況について〈自分が生まれ育った環境はどういうものであったのか。〉と尋ねた。そして、Kさん、Yさんが生まれてから現在までの家族構成や出来事といった家族史を、定位家族と生殖家族に分けて、表4にまとめた。

表4 父親Kさん・Yさんの定位家族と現在までの生殖家族の状況

	Kさん	Yさん
定位家族	<ul style="list-style-type: none"> ・両親、祖父母（母方）、妹の6人家族。 ・Kさんが小6の時、両親が離婚し、高1の時、父が他界。（離婚後も父との交流はあった。） ・両親は共働きで、家事育児は母親がほとんどであった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・両親、祖母（父方）、弟2人の6人家族。 ・両親は共働きで、家事育児は母親に任せきりだった。父親は仕事一本だった。 ・祖母が主に面倒を見てくれていた。
生殖家族 (現在まで)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業後に結婚し、娘2人を授かり、4人で暮らす。 ・その後、結婚生活が不安定になり、離婚し、筆者の母と出会い、筆者の兄を出産し、筆者を出産すると同時に二度目の結婚をする。 ・筆者が3歳の頃、二度目の離婚をする。（離婚後は筆者とともに暮らし、筆者が小学校へ就学すると同時にKさんは、一人暮らしとなる。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業後に結婚し、息子2人を授かり、4人で暮らす。その後、息子たちは結婚・進学のため家を出て、妻と2人暮らしとなる。 ・結婚して数年後、筆者が6歳の頃、筆者の母親と出会い、Yさんの妻認知のもと、筆者の母親と筆者を含む子供達との家族関係を築いていく。

4. 2. 結果と考察

以下にカテゴリーを【 】、質問事項及び筆者の発言を〈 〉、研究協力者の語りを「 」で示し、具体的内容を記述する。

A 【結婚前】

ここでは、結婚前における、定位家族しか経験していない幼い頃の家族像やその影響について〈幼い頃や結婚する以前の自分が思う家族像はどのようなものか。またその家族像は何に影響されたのか。（例えば、父と母がいて…など）〉と尋ねた。

Kさん「朝になったら、ご飯ができとって、仕事から帰ってきたら、風呂と夜ご飯ができとるような生活かなあ…。家にずっと誰かがいて欲しかったな。」

Kさんの場合、奥さんは専業主婦を理想とするものであり、いわゆる、性別役割分業を求めている様子であった。

Yさん「自分の家族と同じような…同居して…って感じかな。」

それに対し、Yさんは親と同居することを前提とするものであった。
また、家族像を描く上での影響に関して、KさんとYさんは次のように語っている。

Kさん「他の家族見よったらそう（家に誰かがずっといてほしい）思うようになった。」
（筆者）〈それは、羨ましいということ？〉

Kさん「まあまあ…羨ましいというか、やっぱり話を聞いてたらなあ。俺は朝飯を食べてなかったからなあ。」

家族像の影響に関してKさんは、「羨ましい」という言葉からわかるように、周りの友人が何気なく話す家庭内の出来事に関して憧れや、嫉妬を抱くようになり、自身の母が仕事の都合上、料理をする機会は少なく、その経験を経て、自分が家庭を持つなら、家に誰かがいた方がいいと考えたのである。

Yさん「自分の家族がそういう（自身の両親と同居し、暮らしていく）家族やから、家族っていうのはそういう（自身の両親と暮らす）ものだっていう認識やな。」

Yさんは生まれた時から家族は“こういうもの”という半思い込みの概念があり、“こういうもの”というのは、自身の両親と同居するということであり、Kさんとは異なった家族像の描き方であった。その概念からか、Yさんは同居するにしても、自身の両親のみの同居を考えており、祖父母でも父方の祖父母のみで、自身の定位家族と全く同じような家族像を理想としていた。

そこで筆者は、「なぜ自身の両親のみなのか」と聞いたところ、Yさんは「母親は嫁いできてるからな。」と答えた。つまり、Yさんの家庭は昔ならではの家族制度の名残があるということがうかがえた。

B【結婚当初】

ここでは、結婚した当初やその後の家族像や家庭生活における目標や理想についての質問事項であり、〈初めて結婚をし、子どもを授かり、生活している際、「こういう家庭にしよう！こういう子育てをしよう！」という理想や目標などはあったのか。また、それは自分自身の育った環境での経験は含まれているのか。〉と尋ねた。

Kさん「仕事いくときには嫁さんが起きて、朝ごはんを作って…というのは変わらんかな。男は外で働いて、奥さんが待ってるっていう憧れがあったなあ。一種の憧れやのー。こうしないといけないというより、こうあってほしいが強かったなあ。」

Kさんは、「憧れ」という発言からわかるように、自身の考える家族像を理想とし、Kさんの語りから、幼い頃に経験したことは繰り返したくないという思いが結婚当初の家族像の理想に大きく影響しているということが読み取れた。

Yさん「特にないな。教育に俺はそんなにこだわらないし、仕事に明け暮れとったかなあ。まあ強いて言えば、女きょうだいがいなかったから、娘は欲しかった。」

Yさんは、理想や目標を持たず、ひたすら働いていたということがうかがえる。Yさんの父親も仕事に明け暮れていたため、男は外で働くということが根強くあり、Yさん自身も仕事に明け暮れ、「そんなにこだわらない」という発言から読み取れるように、教育や家庭内のことは全て、奥さんに任せっきりだったという。

今回のインタビューから得られたことは、育った環境下をもとに、それぞれKさんとYさんが生殖家族をどのように作ろうとしたのかということと、双方とも、定位家族から影響を受けていると意識しているわけではなく、生殖家族を作ろうとしていたということである。

続いて、家族像の変化について〈結婚生活を送っていくうちに、自身が抱いていた家族像は変化していったか。もし、変化していた場合、どのように変化していったか。〉と尋ねた。

Kさん「当然やん。思っていたように生活がでんかったから、家族像は破綻していったなあ。思ったようにならんかったから、家族像は“なーなー”（それほど深くは考えない）で終わったわ。それでお父さん（Kさん）は、よそ（飲み会など）へ逃げていったわな。」

Kさんは、理想としていた生活を送れず、家族像など夢のまた夢のようなものだと考えていったのである。その結果、逃げるように飲みに行くことが増え、家庭は不安定になっていったという。Kさんの語りから、Kさんは非常に強い理想を描いていたということがわかる。

筆者の見解として、Kさんは理想とは違った生活になってしまったがために、逃げるように飲みに行くということであったが、この傾向は、Kさんだけでなく、夫婦間のトラブルによくあるものであり、テレビ番組で裁判の事例として取り上げられるように、一般的な世間の夫の行動パターンに見られるものである。家に帰りたくないと思わせる奥さんが悪いのか、あるいは、夫の理想が高すぎるのか、その点の究明は本研究の目的ではないので追究はしない。家族を作っていくという上で夫婦家族観の相異というのは大事なポイントであると感じた。

Yさん「変化なしかな。もうずっと基本的に自分が働きに出てって感じ。とりあえず、子どもがすくすく育っていけばいい。」

また、Yさんは、結婚前と結婚当初の家族像は、変化することもなく、ただ平凡な家族生活を送っていたということが読み取れた。

次は、KさんとYさんそれぞれに対する質問事項であるため、二つに分けて提示する。

C【二度目の結婚後】Kさん

ここでは、Kさんのみに対する質問事項であり、二度の結婚を経た、Kさんの家族像について〈二度目の結婚の際、初婚と同様、理想や目標はあったのか。(初婚とどのような違いがあるのか。反省などを踏まえているのか。)〉と尋ねた。

Kさん「あったなあ。最初と一緒。」

(筆者)〈結果はどうだった?〉

Kさん「全然ダメ。」

(筆者)〈最初の結婚生活を踏まえたうえで、新たな理想にはしなかったのか?〉

Kさん「一度目で失敗した後でも、理想は妥協したくなかったなあ。理想は理想やけんな。」

つまり、Kさんは、頑なに理想を貫いていたということが伺える。一度失敗していても、「理想は理想」という言葉を念押しのように発言していた。

続いて、二度目の結婚中の家族像の変化について〈二度目の結婚生活を送っていく際、家族像は変化していったか。〉と尋ねた。

Kさん「変化なしかな」

(筆者)〈つまり、初婚の時から、家族像は一緒?〉

Kさん「それ(家族像)は変わらん。もし、三回目結婚するとしてもそれは変わらん。理想は理想!」

やはり、Kさんは、先ほどの語りからも述べているように、理想が全てであるということが読み取れる。これほど、自身の理想を頑なに貫き通すのには大きな理由があるのではないだろうか。おそらく、Kさんは、自身の育った環境に対し少なからず不満を抱えていることが考えられる。それは、仕事のため、常に母親がいるわけではなく、朝ごはんも毎日自分で準備し、母親の手作り弁当等を持った友人に対し嫉妬を抱いていたことによる。

つまり、Kさんは、当時苦い経験をしたからこそ、同じことは繰り返したくないという感情が芽生え、自身の家族像に大きく反映させていたのではないのか。

D【現在の家族関係を築いた後】Yさん

ここでは、Yさんのみに対する質問事項である。筆者の母と出会い、現在の家族関係を築いていこうとする家族像について〈筆者の母と出会い、現在の奥さんとその子どもが2人いる状況において、自分の中の家族像はどういうものであるか。〉と尋ねた。

Yさん「〇〇(筆者の兄)も瑞希もうちの子どもも皆、同じ子どもやと思ってみるとわな。家族っていうか…。」

(筆者)〈つまり、それは血が繋がってなくても、家族はつくっていけるということ?〉

Yさん「それはそうやな。」

(筆者)〈でも、その感情は結婚した当初には抱いてなかったよね?〉

Yさん「うん…、そやなあ。」

(筆者)〈奥さんがいる中で、私の母の存在がいても、“家族”とみなしてもよいということ?〉

Yさん「それは全然問題ないな。」

つまり、Yさんは最初抱いていた家族像とは異なった家族を築き始めたという。理由や原因は後の質問で明らかにする。YさんはKさんと異なり、育った環境に不自由なく、特に不満に思うこともなく家族を形成し、定位家族と同様な家族像を希望としていたが、ある日を境に家族像の幅が広がっていったということがわかる。

続いて、新しい家族状況における留意点について〈現在の奥さん認知のもと、筆者の母や筆者を含む兄妹2人の家庭を支える立場である状況において、自分自身一番何が大変か。また、2つの家庭をもつ上で、気をつけることや意識していることはあるのか。〉と尋ねた。

Yさん「お金が大変。(即答)あと、時間の活用やな。時間の有効活用。意識したことは、子どものために第一に考えてきたし、やるべきことは一通りしてきたかな。」

Yさんは、お金に関しては非常に苦労した様子で、全ては子ども優先に考えてきたという。双方の家庭の子ども達を自立させることを目標とし、なぜなら、将来、母親の面倒をみることができるからと言っていた。Yさんの考えとしては、いつ自分が亡くなって居なくなるかわからないため、奥さんや、筆者の母親の面倒がみれるような子どもに育てたいという一心であった。双方の家庭に対し、隔てなく平等に接するようにしてきたという。結果として、Yさんは、双方の家庭が不自由しないよう心がけ、新たな家族関係を築いていったのである。

続いて現在の家族関係に対するきっかけについて〈筆者やその兄は全く血のつながりのない他人の子どもであるが、なぜ、学費等すべてにおける生活を支えていくのか。また、我々兄妹や母を自身が考える“家族”として含んでいるのか。家族と思ったのはいつであり、きっかけなどあるのか。〉と尋ねた。

Yさん「まあまず、家族やと思っているからかな。〇〇(筆者の母)を大事にしようと思ったら、家族を大事に、子どもたちを大事にしないといけないなということやから、それは、付き合う以上は子どもがいるのは分かるとるんやから。付き合った以上は家族?的な感じ。家族というか、面倒みてやらなあかんってことかな。」

Yさんは、筆者の母親含め、その子どもたちを“家族”とみなし、“家族”というのは大事にするということを前提とし、面倒をみなくてはならないという正義感にかられた様子であった。

E【定位家族と生殖家族のズレ】

ここでは、自身の定位家族と生殖家族の違いについて〈自分が育った環境の家族と自分がつくりだした家族の違いは何ですか。どうしてその違いが生まれたのか。(原因とは？社会の動きなのか?)〉と尋ねた。

Kさん「特に違いはないかな。強いて言えば、違いというか、世の中の風潮は変わってくるし、経済的な問題やってそれぞれあるから、(定位家族の時と自分が家族つくる時の) 影響を受けるものはそれぞれ違うやろなあ。」

Kさんに関して、定位家族と生殖家族のズレは特に無いと述べているが、「世の中の風潮は変わってくるし、経済的な問題やってそれぞれある」という言葉から、少なからず、当事者の感情だけでなく、社会的要因も関係する可能性があるのではないのかと考えているということが読み取れた。Kさんは、強い理想を持ちながらも、結局自身の理想とは裏腹の生殖家族を形成したという結果に至った。

Yさん「愛情の注ぎ方が違うな。この(今現在の) 親子関係とかも違うし、まず、子どもとのコミュニケーションをとる機会が多いわな。昔はそんなになかった。」

(筆者)〈お父さんと話したりは?〉

Yさん「そんなないないない…。全然ない。喧嘩したら、ちゃぶ台ひっくり返すような感じ。」

(筆者)〈その違いが生まれた原因は?〉

Yさん「それは俺の性格やと思う。ほっとけない性格やから。」

Yさんは、定位家族とは全く異なった生殖家族を形成したという結果に至った。異なった原因として、Yさん自身の性格であるという。社会の動きなど関係ないという内容であったが、本当にそうなのかという疑問だけが残った。Yさん自身が気付いていないだけかもしれない可能性も少なからずある。

F【子どもに望む「家族」】

ここでは、自身の様々な経験を踏まえ、子どもたちに対してどのような家族形成を望むのかについて〈自身の子ども(筆者ら兄妹も含む)に望む家族のカタチはどのようなものか。自身とは異なった家族を形成して欲しいのか。それとも自由な家族形成を望むのか。〉と尋ねた。

Kさん「本人次第やろ。本人が幸せやと思う家族を作っていけばいいと思う。もし、俺と同じような状況になった時に、お父さんはこういう経験しとるぞという助言ができるわな。」

つまり、Kさんは、どちらかというと、自由な家族形成を望んでおり、もちろん苦労は

しない方が良いが、本人の幸せを第一としていた。また、いざ子ども達が思いがけない状況になったとしても、いつでも助言できるような存在でありたいという。

Yさん「俺みたいにはならない方がいい…（笑）」

（筆者）〈どうして？〉

Yさん「そりゃ正しい家族のカタチがいいじゃん。俺みたいな家族形成は苦勞するし、ある程度幸せにするなら、経済的なものがないと…どれだけ稼げる人になっても、普通の安定的な家族を作るべきかな。一人の人を幸せに出来ないなら、何人もの人を幸せにできない。」

Yさんは、自由というより、安定的な家族形成を望んでいた。Yさんの「正しい家族のカタチがいいじゃん」という語りから、Yさん自身の家族のカタチは、どちらかというところと正しくないということになる。Yさん自身の経験からきた望みであり、自身の子ども達には同じような経験はさせたくないということが読み取れた。

G【現在の「家族像」】

最後は同様のカテゴリーのもと両者にインタビューを行った。今まで経験を踏まえ、自身が考える「家族」について、Kさん〈二度の結婚・離婚を経験し、いまあなたが考える「家族」とは何か。〉と尋ねた。

Kさん「家族？家族とは？……う～～ん、家族とは繋がりやろ。」

（筆者）〈何の繋がり？〉

Kさん「性格の繋がりやろ。それほど血縁は大事じゃないやろ。思いやりの問題やな。」

Kさんは二度の離婚を経験した結果として、生活に不満を持っていたことが決定的であり、語りから、相性の必要性が伺えた。両者の語りにおいて共通していたキーワードとして「血縁の繋がり」が挙げられる。両者は、血の繋がりとは関係なく家族はつくっていいとしている。

続いて同様に、Yさん〈今の家族形態を形成したあなたが考える「家族」とは何か。〉と尋ねた。

Yさん「出会ってこういう関係になったら、ファミリーやなファミリー。家族やなくてファミリー、アメリカ式ファミリー。別に血が繋がっても、繋がってなくても。大切やと思うから大事にするんやし、大事にするから家族になる。難しいところやけど…、家族っていう一括りにすると、元々夫婦は血が繋がってないからな。血が繋がってない者同士一緒になるんやから。」

Yさんの、血縁関係の語りに関して、筆者の中で印象に残ったのは、「アメリカ式ファミリー」という発言である。Yさんが語るアメリカ式ファミリーとは、主にアメリカでは、

養子縁組が多くあり、血縁関係など関係なく、家族だと思えば、家族としてみなし共に生活するといったスタイルである。Yさんは、そのアメリカのスタイルを自身の家族像に取り入れているのである。先程も述べたが、Yさんは自身が最初に描いていた家族像とは全く異なった家族像を描いていることがわかった。

4.3. 調査のまとめ

〔Kさんの事例〕

まず、Kさんの家族観形成過程の特徴について述べていく。Kさんは、自身の定位家族の経験を踏まえ、奥さんは専業主婦を理想としており、性別役割分業を求めていた。そして、Kさんの幼い頃の経験は繰り返すまいという思いのもと、結婚し、家族を形成してきたが、理想とは異なったものとなる。その後も、理想とする家族を形成することはできなかったが、Kさんの家族の理想は変わることはなかった。つまり、それほどの強い意志を持ったということは、結婚前に経験した出来事が大きく関わっている。

Kさんは定位家族と生殖家族の違いにおいて社会の要因は少しばかりか関係してくるというような語りであったように、Kさんの母親は経済的な面で外へ働きに出て、家にいることは少なかったということと繋がってくるのではないだろうか。

また、現在の「家族像」での語りでは、Kさんは定位家族から大いに影響を受け、幼い頃、様々な感情を抱き、強い理想を持ち始めたことによって、今の「家族像」が描かれていた。Kさんが考える「家族」とは、性格の繋がりであり、血縁関係はそれほど大事ではないと考えていた。

〔Yさんの事例〕

次に、Yさんの家族観形成過程の特徴について述べていく。Yさんの家族観は、「自分の家族がそういう家族やから」という語りからもわかるように、ほぼ自身の定位家族の経験のもと形成されていた。

Yさんは、幼い頃育った環境に対し、特に不満を持ち、何か感じることは無かったがために、理想や目標も特になく、自身が育ったように家庭を作っていけばよいと考えていたのではないかと分析することができる。そのため、Yさんは結婚後、自身の父親と同様、仕事に明け暮れ、家や子どものことは奥さんに任せきりであった。

しかし、筆者の母と出会った後、自身の考えていた家族観とは全く異なった家族を形成していくことになる。Yさんの“家族”というのは、「家族」というワードを重要としているのではなく、Yさん自身がどう思うかによって、家族とみなし、大切にしていかがが重要であるようにうかがえた。ここである一つの理論が挙げられる。それは、社会学者W. I. トマスが提唱した「状況の定義」である。「状況の定義」とは社会学辞典によると、行為を選択するために、自分自身を含む状況全体を意識的に再構成する反省過程をいい、旧来の社会的価値とそれに対応する個人的態度の変容は、新しい条件のもとで行為者が状況を定義するという主観的過程を通して生じるという（社会学 2003:121）。

つまり、Yさんは、自身の立場や状況を把握し、血縁関係があるかないかに関わらず、自身が筆者やその母親たちを家族とみなせば、結果において家族であるとみなすことができるのである。

客観的に見ると、Yさんはただ、感情によって左右されている印象が見受けられた。Yさん

自身の育った環境に左右されるのではなく、その時、思った感情で行動しているように感じた。

つまり、自分の考えていた家族観とは全く異なった家族を形成していった要因としては、Yさん自身の性格によるものであるといえよう。

また、Yさんの語りから、定位家族の生活の様子がよくわかる発言があった。それは、「ちゃぶ台をひっくり返す」である。昔ならではの昭和らしい家庭内であったということが推測できる。父親という存在は厳しく、まともに話すこともなく、威厳のある存在であったに違いない。そのような定位家族で育ったとは思えない、生殖家族を形成していったYさんであった。

以上のことから、KさんとYさんは同じ時代を生きてきたが、考えることはほとんど異なっており、様々な語りがあり、非常に興味深いものであった。KさんよりもYさんの家族像の描き方が、今の社会において普遍的ではないだろうか。幼い頃から経験したことが、当たり前と思うことは、家族に関することだけでなく様々な場面でも当てはまると考える。

日頃、双方の父親と「家族」について話すことなど一切無かった中で、今回インタビューを行った理由は、はじめにでも述べたように、筆者は、自身が育った環境とは異なった環境で家族を形成したいと考えており、そこから派生し、人は家族を形成する際、自身が育った環境にどのように左右されるのかについて研究したいと思い、複雑な家族環境を形成してきた父親達にインタビューすることで、何か得ることができるのではないのかと思ったからである。

今回のインタビュー調査で、筆者が幼い頃から父親達が何を考え、どう生きてきたかということや、今まで知ることの無かった父親の家族関係を垣間見ることができた。自分の子どもに自身の家族について話すことは、少なからず抵抗があるに違いない。特に筆者の家庭は特異であったため、筆者自身もなかなか踏み出せない部分もあった。しかし、特異な家庭だからこそ、他では得ることのできない語りや分析を行うことができたように思う。ある一例の家族観であるが、非常に貴重で価値ある家族の有り様を追究することができた。

5. おわりに

現代の日本では、「家族の多様化」について謳われるようになった。一体、何故なのか。多くの家族研究者が新たな家族の定義や風潮を提示し、様々な言葉が生まれていった。それに伴い、人々は自分の立場を考えるようになり、自分の位置を確立し、主張するようになっていく。その主張が賛同されれば、大きく取り上げられ支持を得、賛同者が増えていくという繰り返しにより、新たな家族のカタチというのは増えていったのではないのか。

本研究の意義は、既存のデータやグラフをもとに分析するだけでなく、筆者自身が目で見て、聞いて感じたことを独自の観点から分析することで、データに埋もれた少数派の家族観を描き出して、導き出せるということである。

筆者が、今回のインタビューの結果を含め考えたことは、時代や社会の動きが「家族の多様化」を作るというよりも、「家族の多様化」という言説が時代や社会の実態を作り出したのではないのかということである。インタビューから、KさんとYさんが育った時代、生まれた時代は、「家族の多様化」など存在しない時代であった。しかし、1980年代の家族の変化から、

2000年代からの、晩婚化や離婚率の高まりなど、様々な家族が形成されるようになった。

筆者自身、幼い頃から父親が2人存在するという事で、自身の家族観は早い段階で形成され、非常に強い願望を持った家族観であると感じる。自身が考える生殖家族は、血縁関係は必須とし、安定的な家族というものである。現在の家族に不満や、悩みがあり、逃げ出したいような感情が芽生えたわけでもなく、むしろ、周りの家庭よりも、幸せに育てられたという認識はあるが、それでも、血縁関係、安定的な家族という家族観をもっている。

父親2名にインタビューを行い、それぞれの家族観についてKさんは「繋がりや血縁ではない性格の繋がり」を挙げ、Yさんは「アメリカ式ファミリー。大事にするから家族」を挙げている。彼らの家族観を聞いて思ったことは、社会がどうであれ、自身の気持ちは貫き通し、責任感を持ち、「父親」という役割を果たし、自らを認識しているという点である。結婚する前に抱いていた家族観というのは、自身が育った定位家族のもと形成されていた。しかし、必ずしも、思った通りの家族を築けたわけではない。彼らはそのような中で、自身の考えは常に持ち続け、「家族」というものに向き合っていた印象を受けた。どんな形であれ、「子ども」という存在に対し、常に神経を巡らせ今日まで生殖家族を作り上げてきた父親に感謝したいと思う。現在の家族で育ってきたからこそ、今回の研究を行うことができたとともに、将来に対する家族像を持つことができた。

今日の日本において、「家族のカタチ」というものはなかなか定義されるものではない。新しい家族用語が飛び交う時代において、人々が社会の規範に適応していくのか、それとも、社会の規範が人々の行動に適応して変化していくのか、両者の関係は非常に難しい。世間の「家族のカタチ」における考え方はまだまだ強固なものなのかもしれない。しかし、結婚や離婚、再婚は言い方を悪くすれば、大人の勝手な行動である。それに取り巻かれる子ども達の子ども観がどのようなものか今回は見るができなかった。子どもが抱く家族観は育った環境に影響されるものであることは、今回の研究で明らかとなり、多様化といわれる家族の有り様の影で、選択の機会をもたない子ども⁴⁾たちの家族観について検討していきたい。

[注]

1) 「一般的な家族」という定義ははっきりとはなされていないが、一般的には、「家族」とは親族からなる集団とみなされ、親族とは、血縁と姻縁のいずれかによって結ばれ、認知しあっている人々をいう（森岡 1997:3）。本研究において「一般的な家族」「一般的なでない家族」の境界を定め、研究していく必要があるため、筆者の独自の観点から定義付けを行った。「一般的な家族」とは、血縁関係であるとし、親と子が血縁関係でなければ「一般的な家族」には含まないとする。また、本研究においては、ひとり親とその子どもに関しては、血縁関係があったとしても「一般的な家族」に含まないとする。

2) 父子関係は、子の養育のための生活物資の調達、ならびに社会化と社会的位置づけにとって重要とされる。例えば、イギリスの社会人類学者マリノフスキーは、子を産ませた男、つまり生物学的父（biological father）に対して、母子の生活を保障し、子を社会に結びつける保護者を社会的父（sociological father）とよぶ（森岡 1997:10-11）。

3) 1960年代後半以降アメリカに端を発し先進資本主義諸国で台頭した、女性の解放を求めるフェミニズム運動をさす言葉である。日本では1970年代前半に展開した（新社会学辞典 2006:88）。

4) 選択の機会をもたない子どもというのは、ここでは、両親の離婚を経験した子どもやステップファミリーの中における子どものことを指す。ステップファミリーとは、「成人カップルの少なくともどちらかが以前の相手との関係から生まれた子どもをもつ家族である（野沢・菊池 2014:84)」。代表的な研究者として、野沢慎司や菊池真理などが挙げられる。

[参考・引用論文]

浅野富美枝他, 2011, 『歴史のなかの家族と結婚』 森話社.

上野千鶴子, 1991, 「ファミリー・アイデンティティのゆくえー新しい家族幻想」, 上野千鶴子他, 『シリーズ変貌する家族Ⅰ 家族の社会史』, 岩波書店, 1991:1-38.

落合恵美子, 2004, 『21世紀家族へ』, 有斐閣.

春日キスヨ, 1989, 『父子家庭を生きる』, 勁草書房.

亀口憲治, 2003, 『家族のイメージ』, 河出書房新社神原.

神原文子 他, 2009, 『よくわかる現代家族』, ミネルヴァ書房.

才津芳昭, 2000, 「家族は本当に多様化したのか?ー家族多様化論再考ー」『茨城県立医療大学紀要』 5:121-129.

佐藤カツコ, 1976, 「親子関係と子どもの社会化」『教育社会学研究』 31(0)17-28.

椎名麻紗枝・椎名規子, 1989, 『離婚・再婚と子ども』, 大月書店.

玉谷直実, 1977, 『子どもの成長と母子関係』, 女子パウロ会.

野沢慎司・菊池真理, 2014, 「若年成人継子が語る継親子関係の多様性ーステップファミリーにおける継親の役割と継子の適応ー」『明治学院大学社会学部附属研究所研究所年報』 44:69-87.

早野俊明, 2008, 「日本におけるステップファミリー（子連れ再婚家族）の法規制」『白鷗大学法政策研究所年報』 2:107-114.

広井多鶴子・小玉亮子, 2010, 『現代の親子問題ーなぜ親と子が「問題」なのかー』 日本図書センター.

松本佑子, 1992, 「子どもの生活意識と親子関係に関するー考察:一般家庭・児童福祉施設との環境の相違をめぐって」『研究紀要. 第一冊分, 人文学部』 3:193-204.

宮島喬, 2013, 『岩波小辞典社会学』, 岩波書店.

森岡清美, 1997, 「家族とは」, 森岡清美・望月崇, 『新しい家族社会学』, 培風館, 1997:3.

———, 1998, 『現代家族変動論』, ミネルヴァ書房.

———他, 2006, 『新社会学辞典』, 有斐閣.

山西裕美, 1994, 「戦後日本の家族変動について:家族形態と家族規範意識の乖離の視点から」『年報人間科学』 15:1-17.

山田昌弘, 1989, 「家族とジェンダー」, 江原由美子他, 『ジェンダーの社会学』, 新曜社, 1989:95-138.

[引用サイト]

厚生労働省ホームページ（最終閲覧:2019年11月1日）

<https://www.mhlw.go.jp/index.htm>

